

# 土方定一のベルリン滞在

福田 衛

日本初の公立近代美術館である神奈川県立近代美術館は、一九五  
一（昭和二十六）年十一月に開館した。館長は東京藝術大学美術学  
部長を務めていた村田良策だった。ただ、（略）国立大学の教官は  
兼任ができないので、富永惣一案も出されたが、学習院大教授の仕  
事から離れられず、滝口修造案は辞退され、自由な立場にあった美  
術評論家土方定一が専任の副館長となり、非常勤の村田館長を補佐  
することになった。（吉川逸治談<sup>1</sup>）という。土方定一（図1）は当  
時四十六歳であり、同年六月に千葉工業大学教授を辞任していた。<sup>2</sup>  
神奈川県立近代美術館副館長となった土方は「エクセキューティ  
ヴ・ダイレクター」として企画運営に従い、<sup>3</sup>やがて六十歳を迎えた



図1 土方定一  
(1904~1980年)

一九六五年一月には同館館  
長に就任する。土方が現職  
のまま亡くなるのが一九八  
〇年十二月二十三日である  
から、館長職をおよそ十六

年務めたわけであり、十三年間の副館長時代を含めると土方は、神  
奈川県立近代美術館で二十九年にわたって重責を担ったことになる。

## I ベルリン入りまでの土方定一

### (一) 自己は語らず

六十三歳時の土方定一は自らを分析して「自己を語ることを好ま  
ないほくは、（略）」「どうして自己を語ることを好まないのだろう、  
と、いつも自問するが、それは汚辱のなかにもあった自己と直  
面することを避ける卑怯なほくの心からのようだ。」「どうも自己を  
語ることは冒頭に述べたように、ほんとうにこまることだ。自己は  
仕事で証明すべきもので、語るべきものでないというのがほくの信  
条であるからだ。」<sup>4</sup>と書いている。あるいは七十三歳時には「ほくは、  
ある理由で、というより、時代のさまざまなシチュエーションのな  
かで死んでいった親しかった友だちのことを、まず書く義務を自己



図2 『歷程』「特集 土方定一追悼」号表紙㉔と  
同号収録「土方定一年譜」一九三〇年の欄㉕

一九三〇年（昭和五） 二六歳  
三月、東京帝大卒業。卒業の論文は、「ヘーゲルの美学」、大学院に残る。五月、シベリア鉄道経由、ドイツに赴く。車中、武林武想庵を病んで、帰国する。  
五月、シベリア鉄道経由、ドイツに赴く。車中、武林武想庵を病んで、帰国する。

に課して、まだ、それは実現しないにしても、自己の過去を書くことを自己拒絶しているようである。<sup>(5)</sup>と告白した。なるほど土方は、多くの自著において自己をほとんど語っていない。

とはいえ、土方の後を継いで神奈川県立近代美術館館長を務めることになる匠秀夫が編んだ「土方定一年譜」<sup>(6)</sup>（図2）は、土方のおよその生涯を伝える。まず、東京帝国大学を卒業する二十五歳までの土方を概観しておく。一九〇四（明治三十七）年十二月二十五日、岐阜県大垣市に生まれた土方定一は学齢前に名古屋市に移り、一九二二（大正十一）年には東京市に転居した。一九二二（大正十一）年四月、十七歳で水戸高等学校文科乙類に入学すると舟橋聖一や草野心平らと同人誌を発刊して自作の詩も発表している。土方は同校で

二度の留年を経験する。  
一九二七（昭和二）年、土方は二十二歳で東京帝国大学文学部美学美術史学科に入学した。当初は大塚保治教授、次いで大西克禮助教授につく。学生時代には、東京美術学校彫刻科に学ぶ浜田辰雄らと指人形劇団を結成した。紀伊國屋での上演で

は草野心平らが出演し、宮島資夫と森三千代が観劇したという。また、土方は脚本「どうして馬は風邪をひくか」の執筆や、フランツ・メーリング『レツシング伝説』の共訳を手掛けている。そして一九三〇（昭和五）年三月、二十五歳の土方は東京帝国大学を卒業する。卒業論文主題は『ヘーゲルの美学』だった。卒業後の土方は大学院に残る。

（二）「土方定一年譜」の誤り

大学院進学後の「土方定一年譜」における一九三〇年の欄は以下のように記される。「五月、シベリア鉄道経由、ドイツに赴く。車中、武林武想庵を知る。ドイツではヘーゲル美学を研究したが、翌年、胸を病んで、帰国する」。つまり土方は五月にドイツに渡り、翌年に帰国したわけだ。ただし、同年譜上の日本出国の時期は誤りである。土方がドイツに赴いたのは「一九三〇年五月」ではなく「一九三〇年十月中旬以降」だった。シベリア鉄道で土方と道中を共にした武林無想庵は晩年、口述筆記で一九三〇年をこう回想する。

『大地』の口訳がすんだのは、八月の半ばすぎでした、(略)／そこへ、ある朝、潤一郎から手紙がきて、話したいことがあるからすぐきてくれるようにとありました。／さっそく出かけていくと、わたしの顔を見るなり、／——ぼくは、とうとう決行することにしたよ！と、いつもとちがった重々しい調子で口を切った潤一郎は、いよく離婚することにした千代子夫人を、佐藤春夫の父親の了承

のもとに、春夫氏との結婚をみとめることにしたいきさつを語りました。／そうして、そのことに関する声明書をきのう日本中のおもなる新聞や、友人たちへ送ったというのでした。<sup>(7)</sup>

一九三〇年の武林無想庵は、三月にフランスから日本に帰国したばかりだった。ほどなく田山花袋が亡くなり、無想庵はその葬儀に参列する。<sup>(8)</sup> 無想庵再婚時の仲人が田山だった。田山花袋死去は五月十三日である。そして谷崎潤一郎が、妻の千代子を佐藤春夫に譲渡するという新聞報道は八月十九日になされた。つまり、一九三〇年の無想庵は五月にも八月にも日本にいたわけであり、土方と五月にシベリア鉄道に乗ることはあり得ない。外交史料館に残る公的記録「外国旅券下付表」(図3)もこれを裏付ける。「外国旅券下付表」には、土方への旅券下付が一九三〇年九月一日、無想庵には同年九月二十二日、そして彼らと同道した山本夏彦には同年九月二十五日の記載がある。

図3 「外国旅券下付表」(左から土方定一、武林盛一＝武林無想庵の本名、山本夏彦)

月二十二日、そして彼らと同道した山本夏彦には同年九月二十五日の記載がある。無想庵の口述筆記はシベリア鉄道車中の土方にも触れる。それによると「ドイツのギイセンへ、いわば、ナチの研究に

おもむく国粹主義者の村上珊瑚郎君、それから、帝大文科の美学を出たばかりの、土方定一君は、反対にすっかりマルクスかおれしてその留学目標も、フォイエル・バッハを研究するつもりだなどといっていました<sup>(9)</sup>。また、山本夏彦も五十七年後の一九八七年、曖昧な記憶を頼りに往時を回想している。山本によると「(筆者注・無想庵の口述筆記)『むさうあん物語』には出発がいつだったか書いてない。到着が十一月だとあるから十月だろう。(略)シベリア鉄道のコンパートメントでは土方定一と村上珊瑚郎の二氏と同室になった。土方定一は私より十二年以上で数え二十八<sup>(10)</sup>である。丈高くにがみ走った美青年である。ただし肺病らしくすすけたような顔色をしていて<sup>(10)</sup>。という。

山本夏彦はこうも記す。「私たち一行がパリへ行く途次ベルリンに立寄ったときのことである。土方定一もその場にいた。／(略)無想庵は私を土方定一に預けて、とるものもとりあえずブタペスト<sup>(11)</sup>へ向った。私は土方の宿に一週間あまり同居していた<sup>(11)</sup>。そして無想庵は、ベルリンを経てブダペストに着いた頃を回想して「翌朝の一字も読めないハンガリー新聞には、すでに十一月だというのに、外套もきず、シベリヤ鉄道でよごれくさった、一張羅のま、のわたしの到着姿が、写真にとられて出ていました<sup>(12)</sup>。」と口述している。当時、日本からドイツのベルリンまでシベリア鉄道を使うと十三日間を要した<sup>(13)</sup>。これらを踏まえれば、九月一日に旅券を下付された土方は、おおむね十月中旬以降に日本を出発したはずである。従っ

て彼のベルリン入りは十月末か十一月初め頃と考えられる。

## II 日本人左翼グループと接触

### (一) 『ハリコフ會議の報告其他』 翻訳出版

土方定一がドイツから日本に戻った時期は判然としない。ただ、土方は、ベルリンに到着したほぼ一年後の一九三一年十一月二十五日に『ハリコフ會議の報告其他』(図4)を日本で翻訳出版している。

同書著者は「屋井參市」と記されるが、これは土方定一の筆名である。<sup>(14)</sup> 同書について、共に文学評論を手掛けた勝本清一郎と平野謙が対談で触れている。それによると「(平野)『ハリコフ會議の報告其他』という本が、屋井三一<sup>ママ</sup>訳で、屋井三一<sup>ママ</sup>というのは、オイサンプインということらしいですが、これは土方定一の匿名とかいうこと



図4 屋井參市(土方定一)翻訳による『ハリコフ會議の報告其他』表紙

とです。(略)いろいろな新聞などに載った部分的な報告を集めて、かりに『ハリコフ會議の報告其他』というふうにしたものだろうと思いますね。／(勝本)モスクワの文学新聞の記事だろうと思いますね。<sup>(15)</sup> という。

ハリコフ會議は「第二回革命作家世界大会」、あるいは「プロレタリア革命および革命作家第二回国際會議」などと表記されるが、一九三〇年十一月六日から十五日まで、当時ウクライナの首都ハリコフで開かれた。<sup>(16)</sup> これは土方のベルリン到着時期に重なる。同會議にはフランスからルイ・アラゴン、ドイツからヨハネス・ベッヒャーらが集うなか、日本代表として出席した人物が先述の勝本清一郎と作家・藤森成吉である。後年、勝本と藤森がハリコフ會議を回想したそれぞれの文章には、いずれも「屋井參市」こと土方定一による『ハリコフ會議の報告其他』表紙図版があしられた。<sup>(17)</sup> ただし、同書はハリコフ會議そのものを伝える内容ではない。土方自身が同書の例言で「こゝには、現在迄に(一九三一年七月)ドイツ語の雑誌に發表されたハリコフ會議に關するものを蒐めた。」とし、同書収録の原稿十本のうち五本は「ハリコフ會議と何らの關係を持たない。」と明かしている。<sup>(18)</sup>

### (二) 革命家と交流

土方定一は自身のベルリン滞在についてもほとんど回想を残していない。それを垣間見せるのが島崎翁助の証言だ。島崎は島崎藤村の三男であり、後に画家となる。島崎は先述の勝本清一郎と二人連れで、土方よりおよそ一年早くベルリンに渡っていた。島崎によると「土方定一がベルリンに現われたのもその頃だった。彼は大学で『唯物論研究会』などに出席していたらしいが、江口渙の紹介状を

持つて藤森成吉を訪ねて来たらしい。彼はいくつかの項目のメモを用意してわれわれの会合に姿を見せた。(略) 彼が会合に現われたのはわずか二、三回ではなかったかと思うが、丹念に雑誌やパンフレットなどを集めていた。丁度、私が下宿を移る時で、ノイケルン地区のスプレー河岸の労働者街の下宿を彼にゆずった<sup>(19)</sup>という。

島崎はまた、土方帰国の経緯についてもその一端を伝える。土方は、ある日突然に咯血したといい、「寂しがり屋の彼は、シユナツプスと呼ぶ安酒をあんなに無茶飲みした故だと下宿のカミサンは言っていたが、強いウオッカのようなやつを一晚で空けてしまう乱暴なやりかたは、いくら土方流の旅愁追放術とはいえ、彼の肉体が受けつけるはずがないと思われた。実家からはスイスへ行って療養するようすすめてきたらしいが、帰国に踏みきる決断も速く、わずかなベルリン滞在で帰って行った。ナチスが世界の舞台に登場する前夜のことである。」<sup>(20)</sup>という。

土方自身の文章から、彼のベルリン時代が窺える少ない例の一つとしては「片山潜と博物館」と題する随筆がある。これは、土方が帰国して十六年後、四十二歳時に『帝國大學新聞』に寄稿したものだ。抜粋すると「先日、展覧会を見ようと思つて、上野公園を横ぎつていたら、私が初めてK氏につれられてベルリンのカイザー・フリードリヒ博物館に行つたときのことを思い出した。」「私と並んで次々と部屋を廻つていたK氏は、そのときなにか独りごとのように、博物館などにきて、こうして絵などを見るのも随分久しぶりだなあ、

片山(潜)さんが生きておられたときは、ベルリンに来るとすぐ僕をひっぱつて博物館に來られたものだ、と私にやや感激深そうに語つたのである。」「いま、こうしてK氏などと書いていると、際限のない——とその当時は思われた——亡命の生活のなかで、ときに郷愁がもたらす影のようなものがあつても、毅然と重厚に生き、私のようなものの厄介までよくみてくれたK氏を思わないわけにゆかないが、(略)<sup>(21)</sup>という。

この随筆に語られる「K氏」とは何者か。「イニシャルがK」であり、「片山潜に近しく」、そして「亡命者」であることが手掛かりだが、この「K氏」とは国崎定洞と見てまず間違いない。とりわけ片山潜との親密度を考えると他に候補者はいない。

国崎は、土方より十歳年長の共産主義者である。一九二六年九月から東京帝国大学医学部助教授としてベルリンに留学するが、やがてドイツ共産党に入党して革命家に転じた。国崎は、土方をベルリンの博物館に案内した恐らく次の年、一九三二年九月初旬に片山潜の要請を受けて、ナチス台頭のドイツからソ連に亡命する<sup>(22)</sup>。しかし一九三七年八月初旬、スターリン肅清に伴う密告によってソ連のゲー・ペー・ウー(国家政治保安部)に連行された。いわれなき容疑は「日本軍のスパイ」だった<sup>(23)</sup>。そして同年十二月十日、秘密裁判で有罪判決を受けた国崎は即日銃殺刑に処されたという<sup>(24)</sup>。

### (三) 勝本清一郎という好敵手

土方定一が渡独した頃、ベルリンには日本人左翼グループ「伯林俱樂部」が存在した。これは留学生有志によるささやかな読書会が次第にマルクス主義に傾斜して、より実践的な性格を帯びていった連帯である。日本の外事警察はその「伯林俱樂部」を観察しており、土方の渡独およそ五カ月後、一九三一年四月頃の動向に触れた記録が残る。それによると「従来伯林在留極左邦人中には直接第三インターナショナル又は獨逸共産党との聯絡に主力を注ぎ居たるものありたるが、最近は重點を反帝運動に集中し、反帝同盟内には既に日本部も成立し居るものと推測せらる。而してその牛耳をとり居りし伊東罔夫歸朝以來は 勝本清一郎並に小林(義雄?)八木(才道?)等なり。別項記載野村平爾は本年(筆者注・一九三二年)二月伯林到着以來同志間を轉々し、最近は当地左傾分子の首領と仰がる、國崎定洞方に寄寓し、反帝日本部に關係を有し出入し居れり。」「伯林俱樂部は昨年(筆者注・一九三一年)四月頃より存在せるもの、如く、國崎並に勝本之が中心となり 前記八木、小林 野村の外 岡内雄三、澤田某 高橋某 島崎某等左翼分子を以て組織し、毎週會合しつゝあり。同會は正しく反帝日本部の外廓団体たる實を有し時事問題研究に藉口して新分子の獲得を目指しつゝあり。」(傍線は筆者)という。

要するに國崎定洞がベルリンにおける「左傾分子の首領」であり、その國崎と共に勝本清一郎(図5)は「伯林俱樂部の中心」と見な



図5 勝本清一郎  
(1899~1967年)

読書会と片山潜を仲立ちしていた。<sup>(26)</sup>また、「島崎某」とは勝本と連れ立って渡独した島崎翫助を指す。島崎が土方に労働者街の下宿を譲り、島崎らの会合に土方が「恐らく二、三回出席したこと」は先述した。すなわち、武林無想庵いうところの「マルクスかぶれ」していた土方が出席した会合とは、國崎や勝本、島崎らが集い、「新分子の獲得を目指しつゝ、」あった「伯林俱樂部」だったのである。

勝本清一郎はその「伯林俱樂部」の会合を「輪読会」と回想している。勝本によると「なにしろ向こうに行つてからコミンテルンの議事録などもはじめに読んだ。(略)ベルリンでコミンテルンの議事録を、片っ端から輪読会で読んだ。一冊六センチぐらいの厚さの本を、千田是也君が片手に持ち、『こんなところは美辭麗句なんだよ』とやっていた。」<sup>(27)</sup>という。一方、その千田が記した「ベルリンの勝本さん」によると「それでも藤森夫妻がベルリンに來られた翌年(筆者注・一九三一年)の三月頃からは、ここにいる芸術関係の者数人がそれぞれの経験や情報を持ち寄つて話しあう會が毎週もたれるようになり、むろん勝本さんも毎回出席された。」<sup>(28)</sup>という。

された。「伊東罔夫」は「伊藤罔夫」の誤記だが、これは俳優・演出家の千田是也である。千田は國崎と共にドイツ共産党黨員として活動し、「伯林俱樂部」の前身である

「江口渙の紹介状を持って藤森成吉を訪ねて来たらしい」土方定一は「伯林俱樂部」と接触した。島崎翁助に下宿を譲られ、国崎定洞には博物館に案内された。そして勝本清一郎と面識を得たことは土方自身が書き残している。<sup>(29)</sup>

勝本は慶応義塾大学美術史学科の第一期生であり、渡独前には『三田文學』編集委員を務めた。大学時代は、ギリシャ美術やレオナルド・ダ・ヴィンチ研究で知られる澤木四方吉、あるいは日本や中国の美術史研究者だった福井利吉郎に学んでいる。<sup>(30)</sup>勝本は帰国後に日本ペンクラブ創立に参加したり、日本ユネスコ連盟理事長を務めたりする。やがて北村透谷をはじめとする文学史研究で業績を残すが、司馬江漢やジョルジュ・ピゴなどを扱った文章も書いた。その活動領域に目を配ると、土方定一（一九〇四年生まれ）にとつて勝本清一郎（一八九九年生まれ）は、言うなれば文学や美術の研究者として同時代の好敵手だったことが分かる。

### III 土方と勝本を結ぶ「佐伯祐三」

#### (一) 土方定一が感動した「佐伯祐三」

土方定一は、ドイツから帰国直後に『ハリコフ會議の報告其他』を翻訳出版した。一方、勝本清一郎はハリコフ會議の日本代表出席者だった。共に文学や美術に一家言を持つ両者だが、彼らにはハリコフ會議とは別にもう一つの接点がある。それは、彼らと同世代の

土方定一のベルリン滞在



図6 佐伯祐三  
(1898~1928年)

洋画家・佐伯祐三（図6）を高く評価した経験を持つことだ。

佐伯祐三は、神奈川県立近代美術館が初めて取り上げた日本人洋画家である。その第

一回「佐伯祐三展」（一九五二年一月二十三日〜二月二十五日、以下、第一回佐伯展）の企画提案者が土方定一だった。土方は、第一回佐伯展が終了した翌月号の『みづゑ』に「佐伯祐三について」と題する原稿を寄せている。そこで土方は「今度、鎌倉の近代美術館で、佐伯祐三展を開催することが決定されたときに、私はそれを運営委員会に提案しながら、しかし私のうちに不安がないわけではなかった。」（略）私が嘗つて昭和12年の佐伯祐三の遺作展を見た感動は感動として、そのままに大切にしまつて置くことの方が私にとって大切であるかも知れないのである。」と記した。<sup>(31)</sup>これら土方自身の回想によつて「第一回佐伯展の企画提案者が土方であること」、そしてその誘因は恐らく「昭和十二年の佐伯祐三遺作展にあること」が分かる。

まず、昭和十二（一九三七）年の佐伯祐三遺作展を概観する。土方が感動を覚えたこの遺作展とは「山本發次郎氏所藏佐伯祐三遺作展覽會」（以下、發次郎所藏展）であり、三月十三日から同月二十一日まで東京府美術館で開催された。同時期の新聞には「若くして

天才的閃光を認められたこの作家の遺作百數十點が所藏家山本發次郎氏の好意により無料で公開された。」とある。同展は佐伯作品最大のコレクターと称される実業家・山本發次郎の所藏百八点を並べた展覧会だが、この作品数は佐伯の個展としては当時最大の展覧(33)だった。

土方が感動を覚えた發次郎所藏展時の佐伯祐三は「若くして天才的閃光を認められた」と新聞で紹介された。佐伯を天才だとする言説としては、小説家・中河與一が「明治以來の天才(34)」と書いた前例がある。とはいえ、同様の表現は管見にして他に見当たらず、どうやら一九三七年の發次郎所藏展の頃から一般に定着したように思われる。例えば童話作家・山本和夫は当時の『三田文學』寄稿において發次郎所藏展を語る中で「天才」なる賛辞を九度使っている(35)。また、山本發次郎も、自身が同時期に制作した『山本發次郎氏蒐藏佐伯祐三畫集』の案内に「この薄命な天才佐伯祐三」と記し、あるいは同案内には「彼の天才彼の藝術を永く汎く世に問ふ」なる見出しが付された(36)。ちなみに、山本發次郎による同画集は五百部限定で、カラー図版も収めている。同画集の定価三十五円は、当時の大卒銀行員初任給平均七十円の半分に相当した(37)。

發次郎所藏展を見た一九三七年三月、土方は三十二歳である。その前年の一九三六年に土方は初めての美術批評を手掛けた(38)。また同年には『近代日本文學評論史』を出版、あるいは一九三八年には内閣興亜院囑託となり、中国美術研究の足場を築くことになる。当時

はつまり、土方の興味が哲学や文学にとどまらず、美術史にも広がる過渡期にあった。そんな土方が感動を覚えた「一九三七年の佐伯祐三」とは、言うなれば天才イメージが流布され始めた頃の佐伯だったのである。

## (二) 勝本清一郎を有頂天にした「佐伯祐三」

土方定一は、佐伯祐三を語るどの自著にも、佐伯との面識を記していない。これと対照的に勝本清一郎は、佐伯のアトリエを訪ねて佐伯と会い、佐伯の絵を一点購入している。それは一九二七年春先のことだった(39)。勝本二十七歳、佐伯は二十八歳。佐伯が、およそ二年間の滞仏から帰国して一年経った頃に当たる。佐伯は既にパリでサロン・ドトヌヌ入選、日本では二科賞を得ており、同年一九二七年八月には再度の渡仏を果たすことになる。

勝本は佐伯アトリエ訪問を回想してこう書く。「もう一人私の知っていた洋画家は佐伯祐三である。パリから一度帰って来た時に、昭和元年(40)だったか、下落合のアトリエにたずねた。弟と一緒だった。アトリエにある絵をどれでも一枚百円で売ってくれるというので、弟も私も一枚ずつ買った。長いこと私にとっては、これが絵を買った唯一の経験だった。」「私はパリの街の風景を入手した。ただし、その類のものとしては最高級のものではなく、どこか描き方のあやふやな個所があった。私の美術観はまだ古典主義だったから、私はこの佐伯の絵を私の部屋に掛けて置くことに不安を感じ、ドイツに

行ってしまったから田中耕太郎さんの奥さんの峰子さんに買ってもらってしまった。<sup>(40)</sup>

勝本が佐伯を訪ねたきっかけは、勝本の弟・勝本英治にある。英治はこう書き残している。「昭和二年の春先のこと。(略)勤先の仲間に、佐伯祐三と大阪の北野中学以来の附合いというのがいて、その仲間から、佐伯がまたフランスに行くことになって、いま一口百円で画会をやっている、自分も附合つたが、お前も一口乗らないかと誘いを受けた。(略)家に帰り、丁度居合わせた兄に自慢話にこれを話したところ、自分も一口乗せて貰いたいということになり、それから間もないある日、案内役の仲間と連れ立つて三人で落合の佐伯のアトリエを訪ねた」。英治によると、佐伯作品を入手した勝本清一郎は「素晴らしい買物に有頂天になり」、佐伯アトリエからの帰途、英治に「晩飯を御馳走してくれた。」という。<sup>(41)</sup>

### (三) 佐伯作品を手離した勝本清一郎

勝本清一郎は、佐伯祐三本人から絵を購入して有頂天になった。しかし、勝本による佐伯評価はやがて微妙に変化していく。勝本が佐伯アトリエを訪問した一九二七年からの三年間を概観する。

佐伯作品を購入した一九二七年の年末、勝本は『三田文學』のアンケートに回答した。これは「好きな挿繪畫家と装幀者」を尋ねるもので、同誌関係者九人の回答が掲載されている。勝本は「挿繪を入れられる事を好みません。」と前置きしつつ、強いて挿繪を入れ

るなら「作品の内容に關係のない裸體畫なり靜物なりのうんと贅澤な原色版をたつた一枚口繪に欲しい」とし、画家の候補として「梅原龍三郎、安井會太郎、小出檜重、若手で佐伯祐三、里見勝藏、前田寛治、故人で中村彝、以上の諸氏の内の誰か一人でなければ厭です。」<sup>(42)</sup>と書いた。

年が明けて一九二八年の八月十六日には、佐伯がパリ郊外で三十年と四方月弱の生涯を閉じる。その三週間後、九月六日の『都新聞』第一面には、勝本による「佐伯祐三君の遺作」と題した「時評」が掲載された。勝本はまず「今年の二科に佐伯君の遺作が五點並んでゐる事は、非常に嬉しく且悲かつた。實際私は彼の死が残念である。來年から彼の繪を期待出来ない事は淋しい。私は彼の繪を尊敬してゐた。」と書き出す。そして勝本は、前年春に佐伯が「再び巴里へ行く前に、その落合のアトリエで一度逢つた事がある。」とし、「口オトの研究所の前の街角を描いたものが記念の爲だと云つて壁に張り残されてあつた(略)」ことや、あるいは「私は佐伯君がさうした何百年に亘る大陸的生活の厚味と取組んだ事に一番興味を持つ。」と綴つた。

そして『都新聞』寄稿からおよそ一年後の一九二九年九月二十一日、勝本はドイツ留学のために福井県の敦賀港から天草丸に乗る。<sup>(43)</sup>先述のように同行者は島崎翁助だった。島崎は、日本出国の数カ月前に勝本宅を訪ねている。当時を回想した島崎によると「昭和四年の初夏、私は深川大工町のアパートに勝本さんを訪問したことがあ

る。(略)さっぱりした室内の壁に佐伯祐三の黒っぽいパリ風景が懸っていたが、<sup>(44)</sup>こころした頹廢美は、いまでは抹殺すべき過去の感性の遺物ですよ。と手きびしいことを言った。という。そしてその「抹殺すべき過去の感性の遺物」は、勝本自身が書き残したようにやがて売却される。勝本の弟・英治によると「その年の秋に兄がドイツに行った。出発に当たって佐伯の風景は買手があつたら売つて欲しい、滞在費に繰入れたいからと頼みを受けた。」<sup>(45)</sup>のだった。

勝本清一郎は、佐伯本人から入手した絵を購入二年後に手離した。ドイツに渡った勝本は、その作品売却で得た「百五十円」<sup>(46)</sup>を生活の足しにする。そして滞独二年目の一九三〇年十一月、勝本はハリコフ会議に臨むことになる。

#### (四)「一九二九年の無感動」と「一九三七年の感動」

先述のように四十七歳時の土方定一は、神奈川県立近代美術館副館長として自身が企画提案した第一回佐伯展(一九五二年)の直後に回想を残している。その「佐伯祐三について」と題する文章の中では、かつて三十二歳時に見た發次郎所蔵展(一九三七年)で覚えた感動を記していた。とはいえ実は土方は、既にその八年前、二十四歳の一九二九年時点で佐伯祐三作品に接していた可能性が高い。

第一回佐伯展を間近に控えた一九五一年十一月の『アトリエ』300号記念特集では、土方副館長の論考「現代美術の展望」が巻頭を飾っている。そこで土方は(略)私は学生時代に1930年協

会(大正15年設立)を見、そこに、例えば、古賀春江が中山巍の滯欧作品の陳列についていっているような『構圖の緊密、強烈な色彩の尖鋭的な対照、それらが聰明な理知の統制によって落ちつきある諧調を保ち、例えば、黒と白、緑と朱など、ややもすれば画面を徒らに騒がしくする色彩が、ここでは重々しく調和している』(第4回1930年展観<sup>(47)</sup>)のを喜んだりしたことを思いだす。と綴った。

土方副館長はすなわち、二十四歳の学生時に見た「一九三〇年協會第四回展覽會」(一九二九年一月十五日〜三十日、東京府美術館、以下、協會第四回展)を回想するのだが、それはほとんど古賀春江寄稿の引用にすぎない。土方が引いた箇所を古賀寄稿の原文に当たると「作品の總體を通じてその特色とするものは構圖の緊密、強烈な色彩の尖鋭的な對照であつてそれ等が聰明なる理知の統制によつて落ちつきある諧調を保つてゐる事である。黒と白、緑と朱等稍もすれば畫面を徒らに騒がしくする色彩が此所では重々しく調和してゐる。」<sup>(48)</sup>とある。

この古賀寄稿は「第四回一九三〇年展感」と題している。土方はそのうち「第四室」について書かれた段落の二つ目と三つ目の文章を引用したのだが、その段落の書き出しに当たる一つ目の文章は「中山巍氏の滯歐作品三十八點は別室佐伯氏の八十餘點と共に近來の好收獲である」だ。同文中の「別室佐伯氏」とは「第八室」に作品展示された佐伯祐三を指す。つまり古賀寄稿のこの段落を引用したからには、土方は必ず「別室佐伯氏」なる文言も目にしている。

しかし、土方副館長の回想は中山巍作品に触れるばかりで、「別室佐伯氏」には何ら言及しない。要するに土方副館長にとつて、二十四歳時に見た協会第四回展とは、「八十餘點」の佐伯作品より「三十八點」の中山作品の印象が強かつたらしく、さりながらその回想に当たつては自身の感慨を吐露するのではなく、古賀春江の言葉を借りて綴るにとどまるのだ。

土方が二十四歳時に見たという上記の協会第四回展（一九二九年）は、佐伯祐三没後五カ月の頃に開かれた。すなわち「八十餘點」の佐伯作品展示には、佐伯追悼の意が多分に込められている。<sup>(49)</sup> 同展を伝える当時の雑誌記事としては、例えば「佐伯祐三が第二次渡佛に依つて作り上げた優れた作品の殆ど總ては此の展覽會に於いて見出すことが出来る。彼の感覺的な鋭敏な才能は何れの作品に於いても感受することが出来る。それと共に日本に於けるエコール・ド・サエキも相等見出すことが出来る。」<sup>(50)</sup>（外山卯三郎）や「佐伯と云ふ人を亡くした事は大なる損失でした。あれ丈けに澤山同じ様な繪を並べて少しも倦怠を感じさせない事は矢張りあの繪が勝れて居る處でせう。」<sup>(51)</sup>（和田三造）などが挙げられる。さらに加えて土方副館長が引用した古賀寄稿にあつては、佐伯作品を飾つた「第八室」をこう記す。「この室は故佐伯祐三氏の遺作室で人はこの室に入つて先づこの夥しい作品がその少數を除く他僅々六ヶ月位の間に爲された事を知つてその藝術に向けられた熱病的な心情に撃たれる。他人の一年は氏の一ヶ月か半月にしか當らないであらう。氏こそ文字通

り畫の爲に死んだと云ひ得る。これ等の作品の前に立つて今更の如く氏の早逝が悼まれる（略）<sup>(52)</sup>」。以上これらを勘案した場合、およそ同展会場を訪れた者ならば、佐伯の遺作に接しなかつたとは考え難い。「八十餘點」の佐伯作品は、迂闊にも見過ごしてしまうような小さな扱ひではなかつたのである。

ところが土方副館長は、同展の回想として、佐伯祐三を語らない。自身が企画提案した神奈川県立近代美術館における第一回佐伯展を二カ月後に控えた格好の時期であつてもだ。無論、それはどこまでも土方の任意によるのだが、なぜ「一九二九年に接した（はずの）佐伯」（協会第四回展）には触れず、「一九三七年に感動を覚えた佐伯」（發次郎所蔵展）をしか例示しないのか。試みに一九二九年から三七年までの「土方定一年譜」などを参照すると、東京帝国大学卒業（三〇年）、斎藤とみとの結婚（三四年）、草野心平、中原中らとの詩誌『歷程』創刊（三五年）といった記述が並ぶ。それらからは、土方の佐伯祐三観に影響を与えるような事象は特定できない。ただ、そこにあえて可能性を探るならば、一九三〇年から三一年のベルリン滞在が存在感を高めるのだ。

それはすなわち先述した勝本清一郎との邂逅である。勝本は早くからの佐伯祐三評価者であり、既に一九二七年の時点で佐伯アトリエを訪れ、佐伯本人から佐伯作品を購入していた。その後、「こうした頽廢美は、いまでは抹殺すべき過去の感性の遺物ですよ」と発言したにせよ、佐伯作品を見る「眼力」において勝本は、ベルリン

滞在時の土方に勝る立場にあったのである。

#### IV ベルリン滞在で得た成果

##### (一) ハリコフ会議への眼差し

「屋井参市」名で土方定一が翻訳した『ハリコフ會議の報告其他』は一九三二年十一月二十五日に発行された。それは土方のベルリン到着、あるいは勝本清一郎と藤森成吉が出席したハリコフ會議のほぼ一年後に当たる。土方の帰国時期は不明だが、土方が同書に記した「こ、には、現在迄に（一九三一年七月）ドイツ語の雑誌に發表されたハリコフ會議に關するものを蒐めた。」なる例言を踏まえると、土方は一九三一年七月をめぐりにベルリン滞在を切り上げたのかも知れない。

疑問は、土方が『ハリコフ會議の報告其他』に携わることになった経緯である。土方が、渡独の以前からハリコフ會議に關心を抱いていたならば、その十一月六日開幕を見据えてハリコフに立ち寄るのが自然であろう。しかし、先述のように、十月中旬以降に日本を出發した土方は、十一月月上旬にはベルリンに居付いていた。すなわちドイツに向かう土方は、ハリコフ會議を控えたウクライナを素通りしているのだ。となると、土方がハリコフ會議を意識付けたのはベルリン到着後であると考えざるを得ない。

土方は、神奈川県立近代美術館における日本人初の洋画家展とし

て、なぜ佐伯祐三を選んだのか。繰り返すが、第一回佐伯展開催当時の土方副館長は「一九二九年に接した（はずの）佐伯」には触れず、「一九三七年に感動を覚えた佐伯」だけを述懐している。その一九二九年と一九三七年の間にはベルリン滞在があり、『ハリコフ會議の報告其他』翻訳出版があった。土方がベルリン滞在時に勝本や藤森と接触したならば、彼らの話題は例えば互いの絵画観にも及んだはずだ。勝本は美術史学科卒業生であり、かつては佐伯作品を自室に飾っていた。また、藤森にしても戯曲や小説を本業としながら、自ら「画キチガイ」と称するほど絵を愛した人物である。ただし、藤森は佐伯との面識をまず持っていない。土方に「佐伯祐三」を語れた人物は勝本に限定されるとみてよい。

『ハリコフ會議の報告其他』翻訳出版に当たって土方は、ドイツ語雑誌などの資料収集を現地で行う必要があった。とはいえ、土方はベルリンで体調を崩してしまう。そんな土方を駆り立てたものは何だったのか、もはや知る術はない。ただ、土方が藤森成吉を訪ね、勝本清一郎とも面識を得たことを考え合わせると、くだんの翻訳出版がハリコフ會議当事者の彼らを触媒とした可能性は極めて高くなる。その翻訳出版のごとく土方は、佐伯祐三に対する興味といったものも勝本から喚起されなかったろうか。自ら購入した佐伯作品を売却した勝本だったが、後年には佐伯作品を国際的舞台に載せる必要性を訴えてもいる。<sup>54</sup>要するに勝本は、やはり佐伯を高く評価していたのだ。土方定一にとってベルリンとは、そんな勝本から「佐伯

祐三を教わる機会」を得た場でもあったのである。

## (二) 佐伯祐三評価の高まり

佐伯祐三没後四十周年を迎えた一九六八年には『佐伯祐三全画集』が刊行された。経済学者にして美術にも造詣の深い脇村義太郎は、そこに「佐伯祐三の画業と蒐集家」と題する文章を寄せている。

脇村は佐伯祐三評価の変遷をたどりつつ「しかし、佐伯に対する一般的な評価を高め、それを決定的なものにしたのは、昭和二十七年一月鎌倉近代美術館が佐伯を取り上げたことであった。前年開館された同館は、ルノアール、セザンヌをもつて第一回展覧会を開き、第二回にはルオーを展示したが、第三回展には、はじめての日本人として佐伯展を開いた。」と神奈川県立近代美術館に焦点を当てた。

続けて脇村は「(略)開館十五周年記念の展示を行なうにあたって、広く一般の希望をアンケートしたところ、佐伯展の再開を求める声をもっとも多いのにこたえて、約百点の油絵をあつめて第二回佐伯展を開き、さらに四十三年には五十数点の未公開佐伯展を開き、戦後三回の佐伯展を開催して、(略)多くの入場者をおつめることができて、佐伯にたいする社会的な支持、ことに青年層の間にそれのたかまっているのを確かめたのであった。／＼こうした佐伯にたいする社会的評価の確立とともに、佐伯の絵の価格は、戦後とくにこの十年間、すなわち佐伯歿後三十周年から四十周年までの間に、急激に高騰しつづけ、それが却って佐伯の絵にたいする蒐集熱を一

層深めることとなった。」<sup>(55)</sup>と綴っている。そして後年、脇村は同文を同じ題で書き改めて「こうしたことは、同館の企画を指導した館長土方定一氏の見識を示すものであって、戦後における佐伯祐三の画業の評価の定着には、同氏および鎌倉近代美術館の功績を見逃がすことはできない。」と土方を称えた。<sup>(56)</sup>

土方定一は、佐伯祐三を日本のフォーヴィスムの典型例だとした。<sup>(57)</sup>七十二歳を間近に控えた土方は、第一回佐伯展を回想してこう綴っている。

「神奈川県立近代美術館が最初に展観した近代日本美術史のなかの作家は佐伯祐三であった。入場者が少なく、亡くなられた(筆者注・佐伯祐三未亡人の)佐伯米子さんが来られて、『ずいぶん、人が少ないのね』と歎かれた声がいまでも聞えるようだ。(略)その後、二回、佐伯祐三展を開催して、その都度、これまで知られていなかった佐伯祐三の作品を調査、発掘している。先年、東京、東芝ビルで開催したときの、たいへんな入場者を考えると、今昔の感に堪えない、といいたいところだ。」<sup>(58)</sup>

土方提案による第一回佐伯展は一九五二年に開かれた。その会期およそ一カ月間の「入場者は僅かに3413人であった。今日からみれば、全く考えられない人数であろう。もっとも、その頃の佐伯祐三の作品の値段は、非常に低かった。馬鹿のように高い値段になったのは、それから数年後のことである。」<sup>(59)</sup>と神奈川県立近代美術館の資料は伝えている。

佐伯祐三は、土方定一による第一回佐伯展を経てさらに重要な作家と見なされるようになった。佐伯祐三評価の歴史において、土方の慧眼は見落とされてならない。と同時に、土方を佐伯祐三に導いたであろう勝本清一郎の存在も記憶しておきたい。神奈川県立近代美術館の皮切りは「セザンヌ・ルノワール展」だった。言うなれば、土方副館長の志向がローカル美術館とは別にあつたことは自ら証言するところである。<sup>(60)</sup> 世界に開かれた日本人画家の展覧を企画するとき、土方の念頭には佐伯祐三が浮上した。そしてその構想の担保は、ベルリン滞在時に知り得た、勝本清一郎による佐伯祐三評価であった可能性が高い。

注

- (1) 佐々木静一「鎌倉近代美術館の出發」(『神奈川県立近代美術館30年の歩み 資料・展覧会総目録』/神奈川県立近代美術館/一九八二年三月三十一日)。土方定一と村田良策は共に東京帝国大学で大塚保治に学んだ。土方が一九三〇年三月に「美學美術史學科(美學)」、村田は一九一九年七月に「哲學科(美學、美術史專修)(美學)」をそれぞれ卒業した(『東京帝國大學卒業生氏名録』二百七十八〜二百七十九頁/東京帝國大學/一九三三年九月二十五日)。
- (2) 『歷程』二百六十九号収録「土方定一年譜」による(歷程社/一九八一年三月一日)。同号は「特集 土方定一追悼」号である。
- (3) 土方定一『ドイツ・ルネサンスの画家たち』(美術出版社/一九六七年十二月二十日)の巻末略歴から。この巻末略歴について小田切秀雄は、土方の「自筆と見られる略歴」だとしている(土方定一『近代日本文学評論史』三百五十一頁/財団法人法政大学出版局/一九七三年十一月二十五日)。

- (4) 『みづゑ』一九六八年五月号四十八〜四十九頁(美術出版社/一九六八年五月三日)。
- (5) 土方定一『トコトコが来たと言ふ』百二十五頁(平凡社/一九七八年十月十一日)。
- (6) 前記の『歷程』二百六十九号収録「土方定一年譜」を指す。
- (7) 武林無想庵・作、武林朝子・筆記『むさうあん物語15』六百九十四〜六百九十五頁(無想庵の会/一九六〇年一月二十五日)。
- (8) 前記の『むさうあん物語15』六百七十六〜六百七十八頁。
- (9) 前記の『むさうあん物語15』七百二十頁。
- (10) 山本夏彦「無想庵物語(十九)」(『諸君!』一九八七年七月特別号三百三〜三百四頁/文藝春秋/一九八七年七月一日)。
- (11) 山本夏彦「無想庵物語(二十)」(『諸君!』一九八七年八月号二百七十七頁/文藝春秋/一九八七年八月一日)。
- (12) 武林無想庵・作、武林朝子・筆記『むさうあん物語16』七百二十二〜七百二十三頁(無想庵の会/一九六〇年四月十五日)。
- (13) 「鐵道省編纂 汽車時間表 十月號 通卷第六十七號」(日本旅行協會/一九三〇年十月一日)。同書九頁時刻表によれば、東京駅を寝台列車で月曜日の午後九時四十五分に出発すると、ベルリンには十三日後の日曜日に到着する。
- (14) 発行は木犀社書院である。ちなみに「屋井參市」による翻訳本は他にヘルンレ著『プロレタリア教育の根本問題』(世界社/一九三〇年五月二十日)がある。
- (15) 勝本清一郎、平野謙「対談 ハリコフ会議のころ」(『文学』三十二号七十一〜九十一頁/岩波書店/一九六四年四月十日)。ちなみに、土方と同じ一九三〇年三月に東京帝國大學「美學美術史學科(美術史)」を卒業した三宅正太郎によると「昭和五年の秋、土方の指示と誘いによって、メイリングの著書とウィットフォーゲルの論文を土方定一と共訳した『マルク

ス主義美学」を脱稿、翌六年共生閣から上梓した。訳者の方は土方が屋井三市、私は三宅洗とした。出版前に土方定一はドイツへ旅立ち、出版までの雑務は私が仕末した」という(三宅正太郎「回想の芸術家たち」二十七頁／財団法人国鉄厚生事業協会／一九八六年三月三十日)。また、神奈川県立近代美術館学芸員として土方の下で働いた青木茂は「新・旧刊案内43土方定一と勝本清一郎、またはハリコフ会議と大逆事件」と題して両者およびハリコフ会議に言及している(『一寸』第四十三号一〜七頁／書痴同人／二〇一〇年八月二十日)。

(16) 『資料 世界プロレタリア文学運動 第四巻』二十五頁(三一書房／一九七三年九月三十日)

(17) 勝本清一郎「プロレタリア文学と私」(『鑑賞と研究 現代日本文学講座 小説6』三百二十二頁／三省堂／一九六二年六月二十五日)、藤森成吉「ハリコフ会議の思い出」(三)『読書の友』一九六六年十月三日第六面／日本共産党中央委員会機関紙経営局)。

(18) 同例言には「クレラの論文の一つは、既に昨年十二月に発表されたもので、私はそれを下宿の婆さんが魔法瓶の中に入れて置いてくれる温かい紅茶をす、り乍ら讀んだ。それから、底無しとも思はれる病氣が續いた。」とも記される。

(19) 島崎翁助「島崎翁助自伝 父・藤村への抵抗と回帰」九十三頁(平凡社／二〇〇二年八月二十二日)

(20) 島崎翁助「ベルリンの屋根の下で」(前記の『歷程』二百六十九号三十一頁)

(21) 『帝國大學新聞』一九四七年八月二十一日第二面

(22) 川上武、加藤哲郎『人間 国崎定洞』二百五十二〜二百五十三、三百四十一頁(勁草書房／一九九五年十一月二十五日)

(23) 加藤哲郎『ワイマール期ベルリンの日本人——洋行知識人の反帝ネットワーク』九十五頁(岩波書店／二〇〇八年十月十五日)。前記の『人間 国崎定洞』二百九頁。

(24) 前記の『人間 国崎定洞』二百二十四頁

(25) 『昭和七年中に於ける外事警察概要 欧米關係 内務省警保局』(同資料収録文献は『特高警察関係資料集 第一六巻』四百十二頁。荻野富士夫編解題／不二出版／一九九二年十二月十八日)。

(26) 千田是也『もうひとつの新劇史——千田是也自伝』百三十七〜百四十九頁(筑摩書房／一九七五年十月二十日)。千田の父・伊藤為吉と片山潜在旧友であり、千田はモスクワ在住の片山潜在と面識を得た後、一九二七年五月にベルリン入りした。

(27) 前記の勝本清一郎「プロレタリア文学と私」(『鑑賞と研究 現代日本文学講座 小説6』三百十八頁)

(28) 千田是也「ベルリンの勝本さん」(『勝本清一郎 近代文学ノート 4』付録／みすず書房／一九八〇年十月三十日)。本稿引用箇所「むろん勝本さんも毎回出席された。」に続けて千田は「この一九三〇年というのは、(略)と書く。すなわち「話しあう会が毎週もたれるように」なったのは一九三〇年と解釈される。しかし藤森成吉は「一九三〇年の一月、私は妻を同伴すること、行先きのドイツからソ連へ行かないという条件つきで海外渡航を許可された。」と書き残す。従って「藤森夫妻がベルリンに來られた翌年」とは一九三一年である(藤森成吉「ハリコフ会議の思い出」(一)／『読書の友』一九六六年九月十九日第六面／日本共産党中央委員会機関紙経営局)。

(29) 土方定一『二時間文庫』のころの事』に「ボクが初めてヨーロッパに行ったのは大学を卒業した昭和五年で、東京駅からベルリンまで三等列車で二百円であった。あとで、ベルリンで、勝本清一郎さんに聞いたことであるが、他の人は東京駅で乗る時だけ三等列車だが、君だけが本当にここまで三等列車で来たといわれた。」とある(『波』一九七七年一月号二十四頁／新潮社)。

(30) 勝本清一郎「僕の先生達」(『文章倶楽部』一九二八年新年特輯百四十五〜百四十六頁／新潮社／一九二八年一月一日)

- (31) 『みづゑ』一九五二年三月号三十八頁(美術出版社)／一九五二年三月三日
- (32) 「佐伯祐三氏遺作展」(東京朝日新聞一九三七年三月十九日第七面)
- (33) 發次郎展の二年前に開かれた佐伯祐三回顧展(銀座二丁目三共ギヤラリー)は八十八点が並んだ(『銀座畫廊ニユース No.2 佐伯祐三回顧展號』／銀座畫廊／一九三五年十月一日)。同誌第四面によると主催者は「銀座畫廊 今口憲一」である。同資料は、朝日見「佐伯祐三のバリに見る焦燥(7)——足跡の実録——」を参照した(同論文収録は『北海学園大学学園論集 第90号』百七〜百十四頁／北海学園大学芸術研究会／一九九六年十二月二十五日)。
- (34) 前記の『銀座畫廊ニユース No.2 佐伯祐三回顧展號』第二面
- (35) 『三田文學』一九三七年五月号百七十頁「新刊巡禮」(三田文學會／一九三七年五月一日)。ただし、「天才」は佐伯祐三ばかりを指していない。
- (36) 『みづゑ』一九三七年四月号(春鳥會／一九三七年四月三日)
- (37) 「昭和十二年度 知識階級就職に關する資料」六十四頁(厚生省社會局／一九三八年二月二十日)。同資料によると「大卒銀行員初任給平均七十円」は技術者の場合である。
- (38) 『藝術新潮』一九五六年七月号百七頁《座談會》新しい批評 古い批評、および『三彩』一九八一年二月号三十九頁、藤本詔三による「追悼 長谷川潔氏・土方定一氏」参照。
- (39) 勝本清一郎は佐伯アトリエ訪問を(略) 昭和元年だったか、下落合のアトリエにたずねた。(『毎日新聞一九六五年十月十日第五面「小出楯重と佐伯祐三」と記す一方で、「昨年の春彼(筆者注・佐伯祐三を指す)が再び巴里へ行く前に、その落合のアトリエで一度逢つた事がある。』(『都新聞』一九二八年九月六日第一面「時評 佐伯祐三君の遺作」)とも書いている。
- (40) 前記の勝本清一郎「小出楯重と佐伯祐三」
- (41) 勝本英治「佐伯祐三の絵」／『新文明』一九六八年五月号三十八〜四十四頁／新文明社。英治は同文で「それから間もなく佐伯はまたフランスに渡り、パリから繪葉書を送つてくれた。」とも綴る。
- (42) 『三田文學』新年増大號百六〜百七頁(一九二八年一月一日／三田文學會)
- (43) 勝本清一郎「赤色戦線を行く」五〜七頁(新潮社／一九三二年一月一日)
- (44) 鳥崎翁助「勝本さんのこと」(勝本清一郎 近代文學ノート3「付録／みずす書房／一九八〇年六月三十日)
- (45) 前記の勝本英治「佐伯祐三の絵」
- (46) 前記の勝本清一郎「小出楯重と佐伯祐三」、前記の勝本英治「佐伯祐三の絵」。
- (47) 土方定一「現代美術の展望」(『アトリエ』300号記念特集、一九五一年十一月号四頁／アトリエ社／一九五一年十一月一日)
- (48) 古賀春江「第四回一九三〇年展感」(『みづゑ』一九二九年二月号二十二〜二十四頁／春鳥會／一九二九年二月三日)
- (49) 同時期には一九三〇年叢書(一)として『畫集 佐伯祐三』が二円五十錢で発売された。同書制作に携わつた外山卯三郎は「一千部の限定出版だったのでありますが、おどろいたほど良く売れて、展覧会終了時には「殆んど残部が少ないほどだったのです。」と回想している(『繪』第百七十号十七頁／日動画廊／一九七八年四月一日)。
- (50) 外山卯三郎「一九三〇?——一九三〇年協會第四回展を観る——」(『アトリエ』一九二九年二月号百六十頁／アトリエ社／一九二九年二月一日)
- (51) 和田三造「一九三〇年協會展覽會」(『美術新論』一九二九年三月号五十七頁／美術新論社／一九二九年三月一日)
- (52) 前記の古賀春江「第四回一九三〇年展感」
- (53) 藤森成吉「知られざる鬼才天才」二頁(春秋社／一九六五年六月十日)。  
本稿筆者が調べる限り、藤森が佐伯祐三を語る文章は確認できない。
- (54) 前記の勝本清一郎「小出楯重と佐伯祐三」。勝本は「四、五年前にバリの佐藤敬君のアトリエで、佐藤君らと佐伯の作品の思い出を語り合つた。(略) 一点や二点フランス人に見せてもダメで、まだ佐伯の絵を百点以上持つていつて國際的舞臺で展覽會をしたことがないのだから、それで評価

しろといっても無理である、そんな結論になった。」と回想する。

(55) 脇村義太郎「佐伯祐三の画業と蒐集家」(佐伯祐三全画集刊行委員会編集『佐伯祐三全画集』二百九十一頁／講談社／一九六八年九月二十四日)。

同書二百八十九頁で脇村は、佐伯祐三を早くから認めた勝本清一郎にも触れ、勝本の佐伯に対する「(略) 評価は時代に先んじていたものといわねばなるまい。」としている。

(56) 脇村義太郎『脇村義太郎著作集 第四卷 大学・本・絵』三百五十一頁(財団法人日本経営史研究所／一九七六年五月二十日)

(57) 土方定一『日本の近代美術』百七十一、百八十三頁(岩波書店／一九六六年十月二十日)

(58) 『土方定一著作集7 近代日本の画家論Ⅱ』四百三十六頁(平凡社／一九七六年十一月十二日)

(59) 柳生不二雄「1950年代の思い出」(『神奈川県立近代美術館30年の歩み 資料・展覧会総目録』／神奈川県立近代美術館／一九八二年三月三十一日)

(60) 土方は神奈川県立近代美術館開館直後のインタビューで「(略) 鎌倉美術館は日本で最初に生れた近代美術館なのだから、特に地方性ということを、現在のところ考えてはいない。もっと他の日本最初の近代美術館として果さねばならない役割を果たしてゆきたい。」と心えている(『日本の美術館Ⅱ 神奈川県立近代美術館』／『アトリエ』一九五二年二月号三十四頁／アトリエ社)。